PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団

第139回◈定期演奏会

戦後50年
人と平和のために
～三木 稔作品による

1995年8月3日（木） 午後7時開演
津田ホール

■主催　日本音楽集団
〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302
TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
■制作協力　奈良音楽事務所
■助成　三菱信託芸術文化財団
ローム・ミュージック・ファンデーション

三木稔と集団の「人と平和」に深く共感する

佐川 吉男

私が三木稔さんの作品に初めて強い感動を受けたのは、32年前に聞いた東京リーダーターフェルという男声合唱団のための「レクイエム」の初演であった。32年前といえば1963年、この年は水俣病の原因がチッソの垂れ流しによる水銀と判明したり、8月には広島で原水禁世界大会が分裂、国際的にはせっかく芽生えた米ソ和解の芽を摘み取るように、ケネディが暗殺された年でもある。

当時若手の合唱曲の作曲家として売出し中だった三木さんは、この南方原住民の葬送の歌に作曲するにあたって、「現代の恐るべき数々の殺戮によって、天寿を全うせず昇天した魂への広い意味での鎮魂歌に植え直す」ことをめざしたと述べていたのを思い出す。平和憲法のもとで、三木さん自身の言葉を借りれば、「東洋のスイスをめざしたはずの戦後日本がまっしぐらに経済や技術の進歩を追い求める……」そして人間疎外が進行するなかで、そのような鎮魂歌を書かずにはいられなかったのであろう。

三木さんに比べると、私のほうがほんの少し年長だが、戦中の滅私奉公の時代から戦後の希望から失望への逆転劇が進行するさなかにかけて青春時代を過ごした点では同様であった。それだけに、三木さんの広範な創作活動の中枢をいつも「人と平和」を大事にする思想が貫いて流れていることに、多大の共感をもって現在に至ったわけである。この思想と創作活動の延長上に、彼が芸術監督を務める昨年の「オーケストラ・アジア」の旗揚げなどもあったのであろう。

三木さんの「人と平和」を大事にする思想の作品への表れ方は、ときに屈折した形もとり、きれいごとではすまされないのも特徴のひとつだ。これもひとつには戦中・戦後の修羅場を通り抜けてきた人間だからであろう。たとえば、今回改訂版初演の「黄の鐘」終章には当初軽妙な現世部分の追加を予定していたと聞くが、それをやめ、あえて戦犯の母が歌う部分で閉じているのもその例であろう。こうしてこの作品は、若者をオウム真理教などに走らせる現代社会への警鐘にもなったのである。

環境破壊への抗議なども含めて、彼自身こうした人と平和のためを意識して書いた作品の数はすでに20に達している。そのほかにも、たとえばオペラ「春琴抄」に見られる極限状態の愛などは、人間が人間らしくありたいという彼の願いの反自然主義的形象化にほかならないと私は見る。だから、1990年度サヴォンリンナ・オペラ・フェスティバルのときのように、その点がよく聴衆に伝わったときは、このオペラは世界の人々を感動させるものとなる。こうした「人と平和のために」という思想に、彼自身は「和才洋魂」と名づけてきた日本音楽の優れた伝統を西洋の大作曲家たちのような精神で活かして、日本的なものと西洋的なものとの高次元での融合を目指すことが重なり合ってきた。戦後50年の節目に、「人と平和のために」という演奏会を考えられたのもこのような三木さんだからこそで、ご成功を祈らずにはいられない。

プログラム
三木 稔作品による

1．くるだんど～奄美の旋律によるカンタータ～ (1963年)

［コーラス］ 大久保混声合唱団（客演）
［　笛　］ 西川　浩平
［尺　八］ Ⅰ＝藤崎　重康　　Ⅱ＝水川　寿也　　Ⅲ＝米澤　　浩
［三 味 線］ 細棹＝太田　幸子　　中棹＝坂口　美香　　太棹＝工藤　哲子
［十 七 絃］ 宮越　圭子
［打 楽 器］ 西川　啓光・望月太喜之丞・臼杵美智代
［指　揮］ 稲田　　康

2．喜怒哀楽 (1974年)

［コーラス］ クロスロード・シンガーズ（客演）
［尺　八］ 坂田　誠山
［琵　琶］ 石田　さえ
［　箏　］ 花房はるえ
［打 楽 器］ 尾崎　太一
［指　揮］ 辻　　正行（客演）

3．黄の鐘 (1992年委嘱作品―改訂初演)

［ソプラノ］ 宇佐美瑠璃（客演）
［コーラス］ コーロ・ネスポラ、大久保混声合唱団女声（助演）
［篠笛･能管］ 西川　浩平
［　笙　］ 池辺　光彦（助演）・大窪　悦子（助演）
［笙・篳篥］ 西原　祐二
［笙・龍笛］ 西原　貴子
［尺　八］ Ⅰ＝藤崎　重康・添川　浩史　　Ⅱ＝米澤　　浩・石田　忠史
［胡　弓］ 吉沢　昌江（助演）
［三 味 線］ 細棹＝太田　幸子　　中棹＝坂口　美香　　太棹＝工藤　哲子
［琵　琶］ 田原　順子
［二十絃箏］ Ⅰ＝熊沢栄利子・桜井　智永　　Ⅱ＝山田　明美・久東　寿子
［十 七 絃］ 宮越　圭子・大泉　一美
［打 楽 器］ Ⅰ＝尾崎　太一　　Ⅱ＝西川　啓光　　Ⅲ＝杉浦　邦雄
［指　揮］ 田村　拓男

※今回は近世と近代・現代の間で合唱が入場するため、演奏を休止します。

くるだんど　奄美の旋律による混声合唱と邦楽器群のカンタータ

「くるだんど」とは、空が黒くなって雨が降ってくるぞ、という奄美の方言。地主たちは、雨が降れば乾いた土地が湿り、砂糖車が動くから大喜び。しかし、やんちゅう（奴隷）たちは、これでまたこき使われる、と悲嘆にくれる。

鹿児島から南西に三百キロ、ツムギで知られる奄美群島は、沖縄や八重山と同じく歌と伝説に満ち溢れた島々である。しかし九州と沖縄の間に位置するという地理的宿命が、南国的な開放性とはうらはらに、常にこの奄美の人々につきまとってきた。近世の歴史をひもといても、琉球王・薩摩藩・アメリカ政府と主が変わり、今は鹿児島県とはいえ、中央の恵みの及びにくい離島である。特に薩摩藩主の圧政は言語に絶するものがあり、どの文献にも、奄美の人たちに課せられた苛酷きわまる労役の姿が記述されている。

三木稔は、1962年に南日本放送から奄美を素材とする作品を委嘱された時、単に奄美の民謡を使うだけでなく、彼らの苦悩とそれを克服して喜びを呼び寄せた人間讃歌のカンターとしての創造を心掛けた。しかも当時、社会から取り残されて内向的で、音楽家としての市民権の主張の少なかった邦楽器奏者を主体とし、それら楽器群に荒々しさを注入しようとした。《くるだんど》ば、その放送録音や舞台での演奏をとおして、日本音楽集団結成の機運を盛り上げ、64年の発足宣言を引き出した記念碑的な作品である。

曲は休みなく演奏されるが、大きくは三部に分けられる。第一部は《くるだんどと掛声(いとう)》と題され、奄美各地の労働の歌の断片や掛声で構成されている。働く人々は迫りくる黒雲に脅えつつ、「くるだんど」とつぶやき、声を合わせて叫び、さまざまな作業が続く。第二部は《舟歌》。苦しい作業の中で、農民や漁民たちは海上に白鳥の幻影を見る。ファルセットを交えた美しい旋律である。そして夏、第三部《八月踊り》が爆発する。そのいろんなモチーフが合唱の各パートに現れ、交互に盛り上がりながら高まって行く。コーダで合唱される「くるだんど」の叫びは、第一部での脅えでなく、人間の未来での勝利の雄たけびであり、全編によく出てくる「ハレ」は「ケ(＝日常性)」と対称される特別なもの、祭りへの願望の叫びである。

喜怒哀楽　男声合唱とソロ邦楽器による

この曲の表題となっている喜怒哀楽は、いうまでもなく人間の感情経験の代表的四態で、日本的な分類。1976年、男声合唱団東京リーダーターフェル創立50周年記念に三木稔に委嘱した作品で、直後の渡独公演の演目としての前提を考慮して、男声合唱に代表的な日本の伝統楽器が四つの感情に振り分けられて組み合わされている。

《喜》には、歌い手が持つさまざまな小ぶりの打楽器に、小鼓のソロが伝統的な奏法で参加するヴァージョンが95年に作られた。《怒》は薩摩琵琶の「崩れ」の手法、《哀》は尺八本曲「鹿の遠音」、《楽》は箏の古曲である「六段の調べ」をそれぞれ演奏する奏者が、合唱に対してコンチェルトのソリストのような働きをする。

詞は秋浜悟史が曲に合わせて書き下ろしたものに、作曲者が加筆した擬声語擬態語、ハミングやヴォーカリーズも感情に合わせて使用されている。《喜》では「愉快」が「かゆい」に繁がったり、「色即是空」が読み込まれたり、音楽の方も極めて自由でアドリブ的である。《怒》は琵琶の奏法を連想させるオノマトペが中心で、それがまた言葉の遊びを拡げていく。《哀》は全編ハミング。この曲は尺八と弦楽合奏との版もある。《楽》は「苦楽」としてブラック・ユーモアで作詞されており、ヴォーカリーズを経て「南無阿弥陀仏」の境地に達する。尚、90年に混声合唱版が作られた時、このコーダの部分で箏以外の楽器も加わるよう加筆され、男声版でも使用される。

黄の鐘　ソプラノ、女声合唱、雅楽器・邦楽器群による

1992年、日本音楽集団の委嘱で三木稔が書いた11年ぶりの大編成集奏楽。雅楽器・邦楽器群そしてソプラノ・ソロに、再演に際して女声合唱を加え、神話時代・古代・中世・近世・近代を経て現代に至る日本史の流れを音楽的に構築している。《タロウ》《急の曲》《峠の向かうに何があるか》などを別にし、集団を中心としたレパートリーとしては最大編成で最長の作品。

日本史の流れは二つの視点で捉えられている。第一に、各時代の音楽様式を想い、そのさまざまな香りを伝えていること。第二に、各時代の女性の代表的なことばや詩歌を歌化して、その時期の女性の姿を浮き彫りにしていること。

音楽様式に関しては、古代の雅楽・催馬楽、中世の琵琶楽・能楽、近世の各芸能との接点を探り、近代では、流入した西洋音楽のスタイルで書きながら、各歴史時代の過渡期に、平和な音楽の時を打ち消す戦争や葛藤のあったことを示す部分が挿入されている。そういった点で、この作品は作曲者が構築した新しい純音楽の形式であると同時に、日本史による一種の音楽劇である。

女性史という意味では、男女の意識が初めて文献に現れたイザナミ・イザナギの叫びを最初として、おおらかだった上代の女性の発言が次第に封じられていくさまが明確に示され、封建的な近世は終に無言のハミングで捉えられている。そして、あのいまわしい侵略戦争の時期は、戦中戦後の事実から作曲者自ら詞を編んで、戦犯で処刑される息子への悲痛な母の叫びでくくり、タイトルとなった《黄の鐘》の意味が見えてくる。「黄」は中国・日本の音名である黄鐘（おおしき）と関連すると同時に、アジアの色であり、注意をうながす強い色。「鐘」の響きはさまざまに人の心を打つという。上記の、戦争や葛藤を暗示する箇所と合わせ、われわれ日本民族が周期的に無残な殺戮を繰り返してきた事実を、戦後50年近い平和と繁栄の中で忘れてはならぬ、と作曲者は警鐘を鳴らしたかったのである。悲劇的な時代の体験者としての義務感と、芸術家としてのエトスに従って。

《黄の鐘》で使用された詞・詩歌

神話時代　あなにやし　えをとこを
　　あなにやし　えをとめを
（古事記上巻三　伊弉冉尊と伊弉諾尊）

古代　恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき
　言尽くしてよ長くと思はば
（万葉集巻四　大伴坂上郎女）

中世　あはれさらば忘れて見ばやあやくにに
　わが慕へばぞ人は思はぬ
（風雅集　進子内親王）

近世　……ハミング……

近代―現代

――学徒出陣で出征する息子に
なぜ　なぜ　お前は征く　志を捨てて
　なぜ　なぜ　私を置いて
　祖国（くに）のため　正義のため（？）
　誰が決めたのです　そのようなことを
神さま　あなたはむごい
あの子を奪わないで

――戦犯を問われた息子に
なぜ　なぜ　お前が罪を　命じたものは誰
なぜ　なぜ　真実を訴えぬ
　いつわりの大義のもと
　召されたお前に　拒むすべはなかった
神さま　戦争って何
あの子は裏切られたのです。

――死刑執行を待つ息子に
いま　いま　黄の鐘が鳴る　奪われる私の宝
なぜ　なぜ　裁くことができる
　戦い合った　人が他人（ひと）を（？）
　もう明日はない　この母
神よ　私をお召し下さい
あの子の代わりに

ああ　なぜ　お前は逝（ゆ）く
ああ　いま　黄の鐘が鳴る
　　黄の鐘が鳴る
（黄の鐘　三木稔）

戦後50年、心から人と平和のために

三木　稔

1945年８月は恐ろしく暑かった。連夜の空襲・機銃掃射の中：海軍兵学校予科生徒の二割が集団赤痢にみまわれた。15日から数日後、私を含め死寸前の十数人がいた病室に、一人の看護婦が「戦争に負けた」ことを告げに来た。その時、なんと瀕死の生徒たちがその看護婦を袋だたきにしたのである。皇国教育下の少年たちに、あの戦争が非人間的な侵略戦争であることなど分かりようがなく、日本が負けると言う者はリンチに遇ってもしかたなかった。最近のオウム事件で入信の若い人たちの報道を聞くたびに、彼らを追い込んだ高度成長下の日本社会や教育は、50年前の教訓を全く生かしていないことを痛感する。

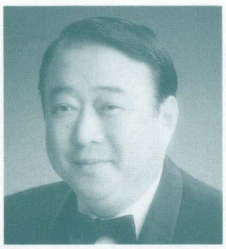
私が海兵に合格し、15才になるかならない春、町中の人に送られて未来の提督への旅に出た日、母が「稔の馬鹿！馬鹿！」とこっそり泣いていたと聞いても、後ろ髪を引かれる想いは一切なかったのだ。その母がこの正月に逝き、親不孝者の私は今、50年前の母の気持ちの如何に人間的であったかが心に滲みる。実は今回、私は《黄の鐘》に現在部分を追加しようとして幾つかの詩を選んでいた。とてもしゃれたセンシブルなことばたちだ。しかし、あの地震や不況やオウム事件に出会って、それらのことばに作曲する気持ちが萎えてしまった。どうしても戦犯の母の叫びの余韻を皆さんに持って帰って頂きたい。この８月は、そのラスト・チャンスなのだ。

辻正行さんの真摯なご努力で、６月には私の極め付きの反戦合唱曲《阿波祈祷文・連作》の男声版を広島で初演できた。このコンサートにも手勢を引き連れて参加して下さる。邦楽器群が合唱と連帯する意義も合わせ、辻さん、合唱の皆さん、宇佐美さん、そして勿論集団の皆さん、心から感謝いたします。

客演プロフィール

◆宇佐美 瑠璃

芸大及び同大学院、文化庁オペラ研修所修了。ミラノに８年間留学。シチリアのベルリーニ国際音楽コンクールに入賞。ミラノで「蝶々夫人」を演じ、好評。再演。ラジオや各地のコンサートで活躍。国内でも「椿姫」等のイタリア・オペラやモーツァルトの主役を演ず。「ワカヒメ」初演のタイトルロールを演じて以来、三木稔作品の主役を常に好演し、「静と義経」「鶴」「古代舞曲によるパラフレーズ」等を歌っている。今秋の「隅田川」の初演では狂女を演ずる。



◆辻　正行

武蔵野音大声楽科卒、同専攻科修了。声楽をリア・フォン・ヘッサート、作曲と指揮を高田三郎の各氏に師事。全日本合唱連盟副理事長、東京都合唱連盟理事長。日本合唱指揮者協会理事長。大久保混声、クロスロード・レディース・アンサンブル等幾つもの合唱団を率いて全国大会で金賞を受賞。自身も84年には最優秀指揮者賞を受賞、プロ男声合唱団クロスロード・シンガーズの指揮者兼音楽監督。

◆大久保混声合唱団

1957年創立以来の常任指揮者辻正行を中心に、38年間ＴＣＦ（辻コーラスファミリー）の中核として活動を行ってきた。読響、新日フィルなどまた、プロの合唱団との共演も多い。全日本合唱コンクール全国大会では、数多く金賞受賞をしている。

◆クロスロード・シンガーズ

芸大卒の若き声楽家を中心に組織されたプロ男声合唱団。「クロスロード」とは、指揮者で音楽監督の辻正行の名前（辻＝クロスロード）からとられ、この合唱団を様々なジャンルの音楽を交差させる「クロスロード」にしたいという願いが込められている。その実力は国内・外で高い評価と広い注目を集めている。

■オーケストラ・アジア東京公演(10/3 東京芸術劇場)が実現！

昨年６月、ソウル〈芸術の殿堂〉で産声をあげ、徳島、岡山でもお披露目した「オーケストラ・アジア」が、今年は東京をはじめ、神戸、岡山で公演をすることになりました。

アジア人がつくったアジアの曲を、アジアの楽器で奏でる〈アジアの交響〉。中国中央民族楽団、韓国国立國楽管絃楽団、日本音楽集団それぞれの団体から20名ほどのメンバーが選ばれ60数名が奏でる深い情感をたたえたアジア発“Asian Harmony”は昨年のソウルでは早々とチケットが売り切れ、満員の聴衆とSBSラジオの完全中継、KBS-TVの収録、大勢の取材陣といった期待の中で進行し大きな感動を呼びました。日本でもNHK（松山）製作のドキュメント番組「アジアを結ぶメロディー」（四国総合、NHK衛星TV）として報道されました。

作品は各国の民謡をテーマにして構成されており、中国からは「茉莉花（ジャスミン）」／劉文金作曲、韓国からは「南道アリラン」／白大雄作曲、「舟歌」／朴範薫作曲、日本からは「Folk Symphony〈伝々囀(でんでんでん)〉」／三木稔作曲、〝五木の子守唄〟と〝刈干切唄〟を主題とした「鄙唄(ひなうた)」／長沢勝俊作曲など、三国から計７曲。これらの曲を劉文金(中国)、朴範薫(韓国)、田村拓男(日本)の三氏が指揮します。

★オーケストラ・アジア日本公演日程

９月30日(土)：神戸公演(神戸文化ホール)
～震災被災者に贈る～

10月２日(月)：岡山公演(岡山シンフォニーホール)

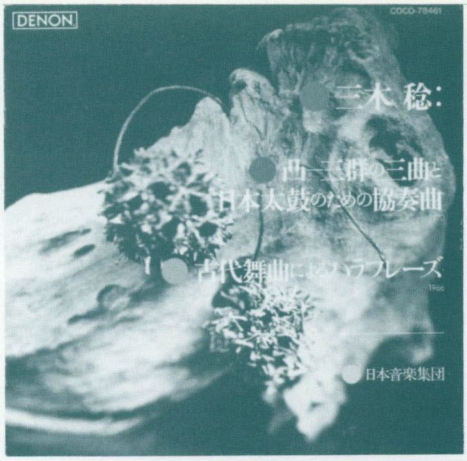
10月３日(火)：東京公演(東京芸術劇場)

〈凸〉

〈古代舞曲によるパラフレーズ〉

三木 稔作曲　CD絶賛発売中！

日本音楽集団創立後、わずか6年の1970年に日本コロムビアから発売され、作品・演奏の素晴らしさで見事芸術祭大賞に輝いた4枚組LPアルバムの中から〈凸〉と〈古代舞曲によるパラフレーズ〉が復刻されました！



CDタイトル：「日本の現代音楽21」
(COCO-78461)

演奏

収録曲：三木 稔作曲

◆凸—三群の三曲と日本太鼓のための協奏曲(1970)

1．第一部
2．第二部

◆古代舞曲によるパラフレーズ（1966）

3．前奏曲　Prelude
4．相聞　Sohmon
5．田舞　Tanomai
6．誄歌　Ruika
7．嬢歌　Kagai

発売元：日本コロムビア株式会社
価格：2,000円(消費税込)
制作：DENON
販売・お問合せ先：日本音楽サービス
〒151 東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302
TEL 03-3378-4741
FAX 03-3376-2033

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和樂器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437